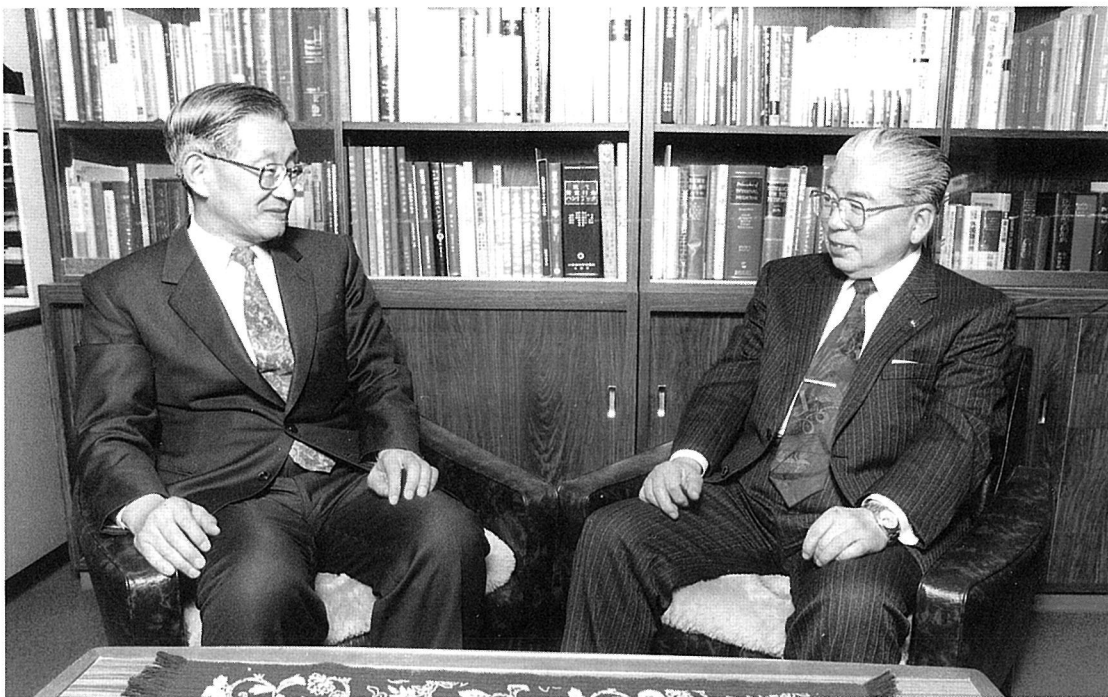


日本産業衛生学会東海地方会

地方会ニュース

発行所 地方会ニュース編集事務局
 〒470-11
 愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪1-98
 藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学教
 室内 電話 (0562) 93-2453
 FAX (0562) 93-3079
 発行責任者 竹内康浩・島 正吾

(題字 皿井 進筆)



竹内康浩地方会長 (左) と島 正吾理事長 (右)

東海地方会長就任にあたって

日本産業衛生学会東海地方会長 竹内 康浩



この度、前島正吾地方会長が日本産業衛生学会理事長になられ、突然私がお後任として地方会長を引継ぐことになりました。

東海地方会は鯉沼荊吾先生、皿井進先生、島正吾先生とすぐれた地方会長を得て発展して来ました。また、多くの労働衛生の先生方が研究者、産業医、産業看護婦、衛生管理者等として大いに活躍され、全国的にも大きな影響を發揮してきました。このような実績のある東海地方会のお世話をお引受することになり、その任務の重大さを痛感しております。

数年前に名大医学部衛生学教室50周年記念誌(1985)や日本産業衛生学会東海地方会史(1986)の編纂に参加して、戦前戦後を通じて私共の先輩の御苦労と成果を垣間見ることができました。現在の日本の産業の発展と労働者の健康水準の向上に大きな寄与をしてこられたことに敬服致しました。

振返って、現在労働衛生に携わる我々の課題を考えると、最近急速に進歩した科学技術を取入れたわが国の産業の発展は目覚しく、それに伴って労働条件は激しい変貌をとげ、新しい職業病や職業関

連疾患などの課題が浮上してきました。他方、古典的な職業病は激減し、健康増進や快適職場が問題とされるようになってきました。また、高齢化社会を迎え、中高年の労働者の健康が労働衛生の重要な課題となってきました。これらの変化は、私が労働衛生に従事するようになった僅か30年ほどの間に生じたものであります。我々はいまだかつて人類が経験したことのない急激な変化を経験しつつあり、労働衛生の面でも我々は世界の最前線に立っていると考えられます。

我々の学問的なよりどころである医学も、分子生物学を中心に急速に発展しており、実学である労働衛生学も新しい課題に新しい学問を駆使して対応することが迫られています。また、日本の経済発展は全世界に大きな影響を与えるようになって、労働衛生の面でも国際的な貢献が求められています。

このような変革の時代に対応するために、東海地方会の執行部も大いに若返りを図ることになりました。しかし、経験豊かな諸先輩の支援がなければ、この難局を乗切することは到底できません。東海地方会の発展のために、一層身を引締めて取り組む所存でありますので、諸先輩のご支援と若手のご奮闘をお願い致します。

勇気、決断そして実行を旗印に 日本産業衛生学会理事長就任にあたって

日本産業衛生学会理事長 島 正 吾
前東海地方会長



さきに私は、皿井 進名誉地方会長の後を受けて、3期9年間にわたって東海地方会をお世話させて頂きました。思えばこの9年間は長くもあり、またあつと言う間の時間の流れでもあった気がいたします。いまあらためてこれまで私を支援し、ご指導賜った地方会員の皆様に、本当に心から御礼を申し上げます。お陰様で当地方会は、

全国9地方会の中でもつねに先進的な発想とたくましい実行力をもって、まさに眼をみはるような、活動が展開されてまいりました。学会員のご努力と積年にわたる見事な活動成果を思うとき、新緑をわたる薫風に洗われるような一種のさわやかな感動を覚えるものであります。

そして此度、全国の学会員の皆様のご推挙により、浅学非才の身ながら社団法人日本産業衛生学会理事長の要職を承ることにになり、その使命の重大さを深くかみしめております。そしてこうした中で、しみじみ思うことは、東海地方会で培われた実学としての産業衛生学への取組みと、不屈の精神的基盤を私のバックボーンとして、一意専心職責を全うしたいと思っています。

新地方会長には、ご承知の通り、私が常日頃から敬愛する名古屋大学衛生学教室竹内康浩教授が選出されました。誰からも親しまれる先生の人柄や、卓抜した指導力、豊富な学識経験によって当地方会がさらに一段の飛躍をとげることを心から期待しています。

そしてまた、激動するわが国の産業社会に呼応して、学会理事長として私に課せられた責務は重大であり、第一に近藤東郎前理事長のもとで学会員によって決意され、取り組まれた定款の一部変更をはじめ産業医・産業看護部会の設置、学会専門医制度の充足等々、こうした学会活動活性化への基盤づくりの後を受けて、平成5年度以降には、全学会員の協力のもとにこれらを具体的に実行できるよう努めなければなりません。そのためには進んで発想の転換を考え、またそれによる学会運営上の変化を恐れてはならないと思います。

「ローマは1日にしてならず」とはいえ、徒らに手をこまねいて議論だけで明け暮れていては、折角の努力も願望も画餅に帰すかも知れません。私ども学会員のすべてがいま一丸となって、勇気と決断と実行を旗印に、前進することを祈念してやみません。

東海地方会の学会員の皆様のご健勝とご発展をお祈りいたします。

特集

第9回産業医・産業保健婦・産業看護婦・衛生管理 担当者のための研修会

日 時 1993年2月19日(金)10:00~16:30
場 所 メルパルクNAGOYA 2F 大ホール
名古屋市中区東桜1-14-3 ☎052-951-7611

プログラム

10:00~10:20 挨拶 地方会長、事業部長
10:20~11:50 講演 「作業関連疾患(Work Related Disease)の健康管理」
名古屋市立大学医学部衛生学 教授 井谷 徹
11:50~13:00 休憩 (昼食)
13:00~14:00 講演 「エイズと産業衛生—現在と将来—」
東京大学大学院医学研究科国際保健学 教授 大井 玄
14:00~14:20 休憩
14:20~16:20 パネルディスカッション「快適職場の形成をめざして」
司 会 滝川 寛(三重大学医学部衛生学教授)
パネリスト 大門俊宏(アクトリサーチ)
天田政章(三菱電機静岡製作所)
小出 勲(トヨタ自動車)
後藤 謹(岐阜県労働基準協会連合会)
特別参加 チャック・ウィルソン
健康づくりコーディネーター
(八神製作所健康開発室)
16:20~16:30 閉会の挨拶

研修会参加者

		医 師	保健婦	看護婦	衛 生 管 理 者	その他
名古屋市	99(34)	21	36	20	0	22
愛 知 県	61(20)	12	9	21	3	16
静 岡 県	31(5)	8	8	10	1	4
岐 阜 県	23(8)	4	6	4	2	7
三 重 県	32(10)	10	8	12	1	1
福 井 県	13(0)	1	4	3	4	1
埼 玉 県	2(0)	2	0	0	0	0
合 計	261(77)	58	71	70	11	51

() 内地方会員

「作業関連疾患の健康管理」を聴いて

堀部 博 (愛知医大・衛生)



この研修会において「作業関連疾患の健康管理」と題する講演がもたれたのには理由がある。先人の努力と多くの悲惨な犠牲者のおかげで古典的な職業病は次第に克服され、職業の現場の環境や仕事に直結する病気は減ってきた。そのかわり、産業医・産業保健婦・看護婦が実際に取り組んでいるのは、仕事との関係はあるが、病気や健康障害の要因としては決定的でないものが増えてきた。その際

仕事は発症要因の一つにしかすぎない。

井谷教授はそこで、まず「作業関連疾患」の定義をはっきりさせて、従来の職業病との差を明らかにする所から始めた。そして作業関連疾患という考え方が一般化してきた理由を整理して挙げた。要するに、

- ①職場における多くの健康障害の多因子性
- ②作業とその環境との関連が認められたら対応する必要性
- ③より健康的な作業環境の追求
- ④仕事を含む生活環境との関連が大きい成人病の増加

である。

そこで古典的な職業病との対比によって「作業関連疾患」の特徴を浮き彫りにした。すなわち、作業関連疾患は職業病と比較して、発生頻度が高く、特定の職業集団だけでなく広く職業集団および地域集団にも共通性があり、発症関連因子が多く、作業はマイナス面とともにプラス面もあり、労災補償の対象になりにくい。この講演の中では直接的には言及されなかったが、健康障害の発生までには至らない予備群と言うか境界域にある人々がたいへん多くて、疾病予防と言う観点からは重要である。

「作業関連疾患」として代表的な健康障害としては、高血圧・虚血性心疾患・慢性気管炎・腰痛・頸肩腕障害・精神障害などが挙げられ、その予防は可能であり、産業医・保健婦・看護婦・健康管理関係者に大いに期待されている。従来の職業病が作業とその環境に原因のほとんどがあり、職業と全く関連のない遺伝疾患のような疾患があり、その間に「作業関連疾患」は位置する。

井谷教授は頸肩腕障害など自らの研究経験実績をもとに「作業関連疾患」について、頸肩腕障害などの具体例を中心に分かりやすく語り、それをどうすれば予防できるか、対処すべきかが自ずと明らかになるように講演を進め、大いなる感銘を与えた。



「エイズと産業衛生」を聴いて

谷脇 弘 茂 (藤田保健大・医・公衛)



最近、HIV感染症あるいはその最終臨床像であるエイズについては、各医学分野から興味ある報告がされている。しかし今回はエイズの疫学的調査研究の第一人者である大井先生から、直接講演を拝聴できることは私自身にとっても、大変楽しみなことであった。当日は満員の聴衆を前にして、むしろ淡々と話される最近のエイズ情報と疫学医学との係わりについて、限られた紙面ではあるが、その一端を紹介したい。

エイズが最初に報告されたのは、1981年に米国からであった。その後世界的に関心が広まり、1985年には血友病患者からの発症が日本でも報告された。問題となる感染源は、米国では同性愛者がエイズ患者全体の7割、麻薬中毒者が2割を占めている。これに対して日本では同性愛者や麻薬中毒者からの発症は少なく、ほとんどが血液凝固剤を使用した血友病患者からの発症であった。しかし今後は異性間性交渉による感染が問題となることが強調された。エイズ流行予測については世界的に見て先進国から発展途上国へと舞台を移し、次第にエイズを学習しない民族に流行していくと指摘された。次に異性間性交渉における流行要因として、タイと日本を比較しながら①感染者の多さ、②感染力、③性交渉人数の3つが上げられた。特に感染力に関しては、性病保有率が大きく関係し、性病を持つ者の傷口からのHIV感染が起こりやすくなることとあった。一方、職種としては医療関係従事者、特に歯科医、看護婦が要注意とされた。しかしHIVの感染率は低く、例えばHIV感染者から採血した注射針で、自分の手を刺したとしても、約0.1%の感染率しかなく、これはHBVの1/60~1/300の感染率にあたる。しかし一度感染すると2年以内に約75%が死亡することが重大である。病院におけるHIV感染者の取り扱い方では、取り扱いを拒否する病院も多く、まだまだHIV感染に対する理解は浅い。これに対して積極的にHIV感染者を取り扱っている病院の、外来、病室、手術室における対応が紹介された。最後に日本におけるHIV患者に対する倫理的問題について、血友病患者のHIV検査結果を患者自身に告知しないことは、現状では患者に精神的不安を与えないためである。また今後外来患者に対してHIV検査をどこまで行うかについては、院内感染を予防する目的からは、術前患者の自己負担で検査を受けるよう院内掲示する病院があることが紹介された。

産業企業体における健康管理体制の中で、HIV感染者との関わりあい方、例えば企業、医療従事者、感染者周辺の労働者の受け止め方などが質疑された。これらの討論を通して現段階での企業内HIV感染対策は、一般的な医学的な問題よりはやはり倫理的問題が重視される。以上大井先生の講演に対して、エイズに対する参加者の関心の高さと熱意が集中して、講演時間の延長を願うほどの盛況ぶりであった。



パネルディスカッション

「快適職場の形成をめざして」を聴いて

村田 真理子 (三重大・医・衛生)



研修会も半ばを過ぎ、いささか眠くなる時刻帯に、『快適職場の形成をめざして』と題したパネルディスカッションは始まった。

進行役の中川祐子氏より、司会、4名のパネリストに加え、*テレビでお馴染みの、という枕詞付きでチャック・ウィルソン氏が紹介された。ウィルソン氏の号令の元、

*右手を挙げて、左手を挙げて、両手を挙げて、バンザイ!、という、世にも簡便(?)なストレッチ体操により会場全体がリフレッシュしたところで、パネルディスカッションが開始された。

司会の三重大学医学部衛生学教室の滝川 寛教授より、パネリストの発言の前に、平成4年7月に改正された労働安全衛生法の「快適職場環境の形成のための措置」について解説があり、このパネルディスカッションが行われる意義の説明があった。また、現状では「快適さ」を測る客観的尺度はなく、その面での今後の検討の必要性の指摘がなされた。

先ず、『快適物理化学的職場環境』について、(株)アクトリサーチ環境技術部長、大門俊宏氏より作業環境の側面のお話があった。国民生活の中で「物の豊かさ」より「心の豊かさ」を重視する傾向が強くなった現在、なお、有害業務を有する職場では『快適』率が低いとの問題提起があった。



続いて、『開発設計技術者の職場環境——三菱電機(株)静岡製作所の例』と題して、同総務部勤務課長、天田政章氏が同社のテクニクセンターの概要を快適職場の好例として話された。しかし、インテリジェントビルゆえの不便さにも言及され、今後の課題が示された。

『人にやさしい職場環境づくり——技能系職場の魅力アップ——』としてトヨタ自動車(株)安全衛生管理部担当、小出勲氏が発言された。作業負担の点数化や作業環境の快適性評価方法の策定等、より具体的な職場環境づくりへのステップを教示いただいた。

最後に、『心身のリフレッシュのできる職場環境』について、岐阜県労働基準協会連合会常務、後藤謹氏の御発言があった。職場環境の改善へ向けての労働者のニーズ、企業側の姿勢、国の支援制度等も含めた幅広いお話であった。

チャック・ウィルソン氏は、迫力のある話ぶりで、御自身の経験を基に日米両国の労働環境や労働者管理の違いについて指摘された。

アツという間の、楽しくも有意義な2時間であった。

シリーズ1 留学生は語る①

Life and study in Gifu City

Name : S. M. Mirbod
Affiliation : Dept. of Hygiene
Gifu Univ. School of Med.



It's passed seven years since I came to Japan with the intention of continuing my study in the field of occupational health. After having a 6-month intensive Japanese course at Nagoya University, I was asked to move to Gifu University to start my major field, and after a year as a research fellow I could be accepted to enter the post graduate course at the Department of Hygiene, Gifu University School of Medicine in April 1987. During the post graduate course I was advised and thought by professor IWATA to work on particularly two subjects in occupational health — hand — arm vibration and noise at workplace. During the post graduate course I learned who to design and conduct a research, and who to evaluate and interpret the results obtained. This was the most important point in my mind to obtain during my study here. Although I'm sure I need much more experiences in my major field, but I'm glad to say that under my professor's supervision I was able to reach the points which

I had planned for. And I'm tremendously glad that we could publish our results regarding the two mentioned subjects in some journals in the field of occupational health. During my study I was really impressed by two things. These include a friendly relation between the professor and students, and a team work spirit among all colleagues. I think these could be the most important factors in any research fields. After my graduation in March 1992, I joined Ibidem Inc. to receive some training in the field of Biotechnology and investigation for its application in the field of occupational health.

It has been quite interesting for me to be accepted as a member of the Japanese Association of Industrial Health. And I appreciate the idea that, even a foreign student can be a member of this association. During my staying here I've tried to present some of our data in the annual meetings of the association in Tokai area, and as I know my Japanese is not great, it is a good opportunity for me to esteem the patience of audience during my presentations in Japanese.

Since I came to Japan I really did not have big problems in my daily life. The people around are kind and even sometimes we have had some communication problems, they've extended a lot of helps to me. The only thing which sometimes I have not been at ease about, and I have to confess is my poor ability in writing and reading Japanese Kanji characters. But I hope some years to come I might be able to improve it. I keep my fingers crossed.

話 題

じん肺と間質性肺炎を めぐる最近の話題

佐賀 務 (藤田保衛大・医・公衛)



産業構造の変化に伴う吸入粉塵の質、量の変化、じん肺患者の高齢化、さらにはわが国のじん肺対策の効果を背景として、じん肺症をめぐる環境も変化しつつある。千代谷らが胸部X線診断においても、従来のけい肺に代表される粒状陰影中心の所見から irregular opacities 中心の所見へと移りつつあると指摘しているように、石棉肺、炭素肺、珪藻土肺、溶接工肺、アルミニウム肺など従来から知られている吸入粉塵以外にも、びまん性間質性肺線維症ないし不整形陰影を合併するじん肺症が注目されている。斎藤らはじん肺症剖検肺の検討から、このようなびまん性間質性肺線維症を伴った頻度が年々増加し、最近では30%にもものぼること、また病理学的には従来の classical silicosis とは異なる、mixed dust pneumoconiosis または silicate pneumoconiosis の特徴を備えていること、またこの種の線維化の起こり方として、(1)線維化が結節を連結してゆく形、(2)usual interstitial pneumonia(U I P)に類似して下肺野で線維化が高度になる形があると述べている。近年、肺内沈着粉塵の鉱物学的分析方法が進歩し、U I P 様の変化を起こす粉塵として、タルク、雲母、ムライト、カオリン、ゼオライトなどアルミニウムやマグネシウムを主体とした珪酸塩も挙げられている。シャモットとは、アルミノケイ酸塩系の耐火粘土を一度焼成し粉碎し直したものであるが、われわれも、最近、窯業シャモットの原料取扱作業者のなかにこうした所見を持つものが高率であることに着目している。

この他、コバルトなど超硬合金の暴露が、職業性喘息や病理学的に giant cell interstitial pneumonia (G I P) を呈する間質性肺炎を起こしうるとはよく知られるようになったが、このような吸入暴露物質とびまん性間質性肺炎の関連があらためて注目され、まだ原因不明の疾患とされている。特発性間質性肺炎 (I I P) についてもその可能性が論議されている。厚生省「びまん性肺疾患」研究班の I I P の診断規準 (第3次改訂) (日胸疾会誌30巻7号) では、慢性型は定型例A群と非定型例B群に分けられ、特に後者では病変の分布が不均一で高率に粉塵吸入歴が見られるため、I I P 成因の一つとして経気道性 noxae の役割が論議されている。さらに I I P の肺組織内沈着物の検索ではアルミニウム、シリカが有意に多く含まれていることも知られている。これらの研究は環境暴露濃度の分析については不十分な面もあり、内科学と産業衛生学のより連携した研究が必要である。無機粉塵ばかりでなく、有機粉塵による間質性肺炎ないしは過敏性肺炎の問題もあり、進歩の著しい疫学的要素も取り入れた総合的な視点が今望まれていると思う。

I L O 条約・勧告と 労働衛生関連法制度委員会

清水 善 男 (三菱電機静岡)



「I L O から出されている産業衛生に関する条約、勧告、通達などについて検討し、重要なものを選び産業医学に掲載していくことにした」これは昨年の学会総会 (徳島) で報告された労働衛生関連法制度検討委員会 (委員長・山田信也) の91年度報告書の中の一節ですが、その後、これをどう具体化していくか委員会で討議を重ね、未だ批准していない多くの条約の中で特に産業保健に関連の大きな「職業上の安全・衛生および作業環境に関する条約 (第155号) 勧告 (第164号), 1981」など四つの条約、勧告について問題点を整理してみようということになりました。それについて少し個人的な注釈を加えて皆さん方のご意見がお伺いできればと思います。

既によく知られている職業衛生機関に関する勧告 (第112号, 1959) と、その後改定された第161号条約、第171号勧告 (1985) についてはその構想の内容がほぼ固まったと言われる産業保健 (推進) センターの運営にとっては勿論のこと、現行法制度では性格の不明確な産業看護職の専門性、独自性の社会的確立というきわめて今日的な観点からも一層理解を深めることが大切ではないかと思えます。なお、91年大阪の学会での I L O : 小木和孝先生の特別講演「国際動向にみるこれからの産業保健」の全記録が「現代日本の労働と健康」(産衛・近畿地方会編 1992, 10) に集録されております。

次に化学物質関係のものですが、日本も批准している職業がん条約 (第139号)、勧告 (第147号) 1974の採択に続いて国際的には70年代後半から有害化学物質の規制が強化されるなど、近年特にがん原性や微量長期間曝露の影響についての関心が高まって来ました。これは地球規模での化学汚染の進行という深刻な状況を踏まえたものと思えますが、秋の全国産業安全衛生大会でもこの10年来、特に化学物質管理部会を設けてシンポジウムや研究発表など啓蒙活動が活発に行われています。そして、90年に採択された化学物質条約 (第170号) と勧告 (第177号) を設けて、化学物質安全データシート (MSDS) についての論議が産業現場でも高まって来ました。

また、今年の元日付けで発表された「ガラスウール繊維及びロックウールの労働衛生に関する指針」にも関連するが、1986年のアスベスト条約 (第162号)、勧告 (第172号) について改めて関心が寄せられました。バブルの時代に古い公共建築物の解体、増改築が進められて俄かにアスベスト汚染についての社会的関心が高まり、80年代半ばから関連業界と行政は挙って汚染防止対策に取組んで来ました。このところ、余り耳にしなくなりましたがアスベスト問題が終わったわけではないしその健康障害については、職業曝露に限らず一般生活環境汚染まで注目されており、今後とも大いに関心を持つべき課題であると考えます。以上のように産業保健サービスの在り方と有害化学物質の規制にかかわる国際的動向について勉強しようと考えております。

随 想

雑 感

滝 川 寛 (三重大・医・衛生)



子供の頃のことであり記憶は定かではないが、少年雑誌の中に未来図を画いたものがあった。地下に都市が作られ、空にはジェット機のような物体が飛んでいた。信じられない夢の世界であったが、今ではそれらが現実のものとなっている。作者の空想力の逞しさに驚くとともに、その夢を現

現させた科学技術の進歩に目を見張るばかりである。

大学受験室の様相も近年著しく変化した。かつての手回し計算器や重量感あふれる測定機類は姿を消し、空調された室にはパソコンが整然と並び生体機能の解析装置もコンパクトになった。シールドルームなど作らなくてもきれいな生体電流が得られるし、結果はコンピューターが解析してくれる。余白の多い記録紙や計算紙に最もらしく大量のデータが積みあげられる。このように進歩した現実を喜ぶべきか悲しむべきか思案に暮れているというのが正直な感想である。

人類の歴史を振り返ると自然環境の変化の中で適応し、淘汰され、適者生存の原則に従って進化してきた。しかし科学の進歩は人為的な環境を出現させ、その新たな第二の自然ともいえる環境に適応を迫られている。地球環境の変化によって各種の生態系に変化が生じつつある。21世紀を迎えるにあたって利便性のみ追究し過ぎたことへの反省が必要となるのではなかろうか。科学技術の進歩は地球上の生態系にとってどのような意味を持つかを今こそ考えておかなければならないと思う。

一方、産業保健分野でも労働者の生活環境や労働環境の変化によって健康影響も多様化し、集団への対応から個への対応へと変化している。現状ではTHPの推進などが1つの重要課題と考えられるが、進歩した科学技術産業の基盤を支える多くの中小企業労働者はその恩恵に浴しているとはいえない状況にある。加えて快適職場の形成をめざす活動が展開されつつあるが、中小企業の労働者が快適な潤いのある職場環境で労働できるのはいつの日であろうか。かかる産業保健サービスの企業規模別格差を是正する目的で平成5年度から都道府県産業保健支援センター、地域産業保健センターのモデル事業がスタートするが、建て前論だけでなく実質的な成果を期待できる地域産業保健センターの今後の歩みに大きな望みを抱くものである。

社会科学系における
産業医学教育の一例

長谷川 弘 道 (常葉学園浜松大学長)



30年近くにわたる産業医学研究の現場からはなれて、昭和63年4月に開学した常葉学園浜松大学(経営情報学部)に学長として就任してから5年余をすごした。今までとは全く分野を異にする社会科学系の学部を持つ大学で、これまでの私の知識・経験をいかに学生に伝えていくべきか——こ

この点について、実は大学・学部の設置申請の際に考えたことを少し記したいと思う。なお、この大学では平成6年4月開設予定で国際経済学部の増設を計画中であるが、産業医学教育に関する基本的姿勢は経営情報学部と同じである。

経営情報学科のカリキュラム構成は、経営学科プラス情報科学と考えてよいが、専門関連分野に労働科学あるいは産業心理学を入れ得ようになっている。本学では産業心理学を設定し、更に従来の一般教育分野の自然領域に生命科学を設定している。いろいろな事情があって私はいま生命科学を担当しているが、この中で前期には狭義の生命の科学を、そして後期に労働科学を講義することにして

いる。この理由は、本学部をでて企業の中に働くものにとって、ヒトとして生きること・人間として生きること・労働者としての健康を保持すること等の基本知識を身につけることは是非とも必要と考えたことによる。すなわち前期の生命の科学では、ヒトとして生きること、そのエネルギーの流れとその源泉となるDNAの役割りを、そして後期の労働科学では働くものの健康保持について、環境管理と健康管理の両面から説くことにしている。なお、コンピュータ関連での作業管理も学科の性格として講義に盛り込んでいる。

いま、生命科学というと、ややもすると遺伝等に焦点を当てたDNAの講義が主となると思うが、生命科学の目的が、究極的には人間の健康(各種の存続も含めて)・地球という環境の中での人間の健康保持にあるとすれば、それぞれの学部学科の中で、それぞれに合った形での生命科学が開講されていて自然であると思う。

いま、各大学とも教育課程の見直しが行われているが、一般教育の見直しに当たって、従来の人文、社会、自然の3分野の域を取りはずしたり、あるいは専門科目との融合・調和を企図する大学も多い。単に科目の見直しだけでなく、内容までその見直しの対象とするところもあるようである。こういう経過の中で、生命科学についての一例としてこの拙文をご笑読いただければ幸である。

シリーズ2 若手産業医に聞く④

魚心あれば

山田 琢之 (名古屋市職員健康管理センター)

『莊子』が弟子と一緒に歩いていると、魚が川の中を泳いでいるのが見えた。そこで弟子が莊子に向かって「魚が楽しそうに泳いでおります」と言った。すると師匠の莊子は「お前は人間で、あれは魚だ。あの魚が愉しんでいるかどうか、人間であるお前にどうしてわかるのだ？」と答えたという。



このことは延長して考えれば、詭弁哲学かもしれないが、産業医学にもつながる教訓である。労働安全衛生法改正後、安全衛生管理体制の充実や、健康保持増進に関わる措置等が計られた。しかし大部分の事業所では、健康管理の実施と増大した情報の処理、つまり健康診断の事後処理に追われる毎日ではないかと思われる。

産業医が臨床医と大きく異なる点は職域という現場を持っているということである。例えば、心電図検査により異常所見が認められ

た場合、産業医は疾病管理や勤務制限を行なうわけであるが、これを心電図の結果だけで判断するのは危険でもあり、循環器専門医や主治医にかなうわけなのである。その従業員がどのような環境で働き、どのような作業をしているかを知り、実際に産業医が作業負荷を体験してみないと「魚心」が分からないのである。

私が担当する名古屋役所市長部局の職員は約2万人であり、約280の事業所を持っている。このことは現場すべてを、なかなか見て廻れない私自身の反省である。常に職場を見て廻り、従業員と接していれば疾病管理ではなく、予防につながっていくと思われる。

私は救急医療を中心とした臨床医学を6年経験した後、産業医学を学んで8年が過ぎた。市役所は事務職場が多いと思われがちであるが、実に多種多様の職種から成り立っている。放射線・有機溶剤使用職場(各研究所)、硫化水素の発生による酸素欠乏職場(尿尿処理場)、土木・建築現場(土木局、建築局)、農薬使用職場(農政緑地局)、給食指曲り職場(教育委員会)、塵肺職場(環境事業局、衛生局)、人畜共通感染症職場(動物園、屠殺場)、深夜業務職場等々労働衛生すべてを網羅しているようである。このような職場は大変であるが、いろいろ勉強出来ることは楽しいことである。

常に「魚心」を忘れないように積極的に現場(職場)を見て廻り、これからも働く人の気持ちが分かる産業医でありたいと思う。

学会研究会

第32回頸肩腕障害・
第37回腰痛合同研究会

上島 通浩 (名大・医・衛生)

頸肩腕障害腰痛合同研究会は1992年12月12日(土)愛知県勤労会館で行われた。演題13題、追加発言2題の計15題の発表があった。国際的動向については、ICOHにおける運動器疾患委員会の動向や作業関連運動器障害の予防策に関する声明案の紹介があり、またアメリカにおける手根管症候群の実態と日本での快適職場指針との関連について報告がなされた。現場における調査や健康管理への取り組みとしては、保育所保育、養護学校教員、地域生協の従業員、社会福祉施設職員についての発表があった。整形外科の立場からは、職業性腰痛の分類の試みが紹介されたり、また、フロリダ大学で開発された背筋力増大装置による訓練の実績が報告された。これは、訓練は週1回で充分であること、通常行われている訓練では背筋群を鍛えている場合が多いこと、したがって効果的な背筋力の訓練には筋電図によるバイオフィードバックあるいは背筋の収縮の手での確認が必要なことなど、実際的な話で個人的に印象に残った。午後の休憩後は予防対策、ガイドラインについての発表があり、最後に追加発言として、現在労働省が中災防に依頼して腰痛予防対策指針を作成中であることなどの報告がされた。

作業関連運動器疾患はその予防が国際的にも注目されてきている。研究会への参加者は約50名にのぼり、労働衛生の分野にはいっ

て間もない私の目にも出席者の意気込みが感じられた研究会であった。

第20回 職業性アレルギー
研究会特別企画

井出 祐子 (藤田保衛大・医・公衛)

第20回職業性アレルギー研究会特別企画が平成5年1月30日に愛知県医師会館において、免疫アレルギー学研究的な新しい展望を主題に開催された。

冒頭で労働科学研究所の野村先生より職業性アレルギー研究会の発展と現状、会の特徴や会で討論されてきた主な課題について話され、これらのことが産業衛生、労働衛生の領域にどう反映してきたか、更に今後の課題について報告された。

続いて特別講演として、結核予防会結核研究所の青木先生による「免疫・アレルギー学的視点から見た結核の現状」、日本医大名誉教授の奥田先生による「花粉症の予防と治療」、最後に「間質性肺疾患とアレルギー」を名古屋市立大学の山本先生にご講演を頂き、熱心な質疑応答が行われた。特に興味深かったのは青木先生のご講演で、すでに各国から報告されているHIVと結核の両方に感染した症例や世界及び日本における結核の将来についてうかがい、改めて結核を身近に考え、深刻に見直さなければならないと感じた。

今回の研究会の前日には名古屋市内に雪が降り、講演会出席者も少なくなるのではと思われたが、幸い当日には雪も解け大勢の方が参加し、盛会のうちに閉会した。

第6回 職業性肺疾患研究会

近藤 正人 (近藤医院)

地方会の研究会には、様々な会があり、どの会も盛会で、地方会の活発さがうかがえる。本会も寒い日と記憶しているが、30数名の参加を得、熱意のこもった研究会であった。その上、若い先生が比較的多く、これからの活動に期待が寄せられると共に、いつもながら医師会の先生がたの熱心さに敬意を表したい。

まず、吉野貞尚先生の特別講演「じん肺の歴史にみる労働衛生」から始まった。本の出版を目前にして、長いじん肺臨床経験の上に立ち、じん肺に関係のありそうな古典にまで言及され、じん肺の歴史をまとめられた。そのご苦労には頭が下がると共に、先生のうん畜のあるお話を楽しく聞かせていただいた。

ついで症例検討に入り、6演題について熱心な討論が行われた。症例ごとにX線フィルムが呈示され、全員シャーカステンの前で「粒だ」、「網だ」、間質性？肺泡性？肺水腫？と賑やかに論議され、活気に溢れる情景だった。その中で印象に残ったのは、銀ろう溶接にみられた急性カドミウム中毒と思われる症例、シャモットじん肺に見られた下肺野の異常影出現頻度の高いことであった。

最後に調査報告として、久永直見先生から「新都市の蛇紋岩産地と付近で発生した悪性中皮腫の症例」が報告された。愛知県にもアスベスト産地があることを知り、あらためて不勉強を恥じると共に、悪性中皮腫の診断の難しさ、アスベスト繊維が肺内に存在する意味の難しさを痛切に感じた。

充実した1日であったことを記し終わりとす。

寄 稿

平成4年度地方公共団体
選任産業医研修会

山田 琢之 (名古屋市職員健康管理センター)

平成4年度地方公共団体選任産業医研修会が、平成4年1月21日東京都千代田区番町グリーンパレスで開催された。主催は財団法人地方公務員安全衛生推進協会〔自治省の新しい外郭団体〕、後援が財団法人日本医師会である。参加資格は地方公共団体が選任している産業医(常勤職員、非常勤職員)、または地方公共団体に勤務している医師で、定員100名、受講料は無料である。

この研修会を自治省が財団法人を作ってまで行なうのは、地方公共団体において産業医の選任率が83.7%と低いほか、兼務の産業医が多く(例えば、保健所長や市立病院の医師が兼務)、産業医の職務が必ずしも充分に実施されていない状況だからである。

民間企業では考えられないことであるが、全国の都道府県、市町村の自治体で、専属産業医はたったの7名しかいない。地方公共

第6回 振動障害研究会

小笠原 和枝 (名大・医短)

第6回振動障害研究会が、平成5年2月27日名古屋大学医学部・鶴友会館で開催された。演題は(1)卓上グラインダー等による振動影響(岐大・井奈波良一先生)、(2)振動障害患者と膠原病：免疫学的検討(名大・松本義也先生)、(3)東海地方の振動障害の現況(岐大・岩田弘敏先生)、(4)最近のイギリス・アメリカの振動障害研究の動向(名大・山田信也先生)の4点であった。

演題(1)では卓上グラインダー作業者は、手指のレイノー現象、しびれなどと同時に、緊張度の高い作業姿勢のため首や肩の凝りなどの自覚症状が大きく、頸腕症候群との鑑別が困難と報告された。演題(2)においては、VWF患者の抗核抗体が非常に高く、さらに血清免疫学的視点からの検討の必要性が指摘された。演題(3)では、東海地方の振動障害は減少傾向にあり、認定患者は高齢者が多いこと、また林業と建設業での発生が多いと報告された。演題(4)では、英国の研究は工学的見地あるいは臨床医学との関連で活発であるが、米国での研究は立ち遅れ、障害対策が不十分であると指摘された。

20名の出席者による今回の研究報告と活発な討議において印象的であったことは、今後の振動障害研究がマクロ的視点からミクロ的視点へと展開し、さらに振動障害の要因分析へと発展する可能性が期待されていたことである。当日暖房の効きが悪くてすみませんでした。

体住民の約1%が地方公務員職員とすると、人口10万人以上の都市での公務員数は1000人を超えているはずなのに。

当日、北は北海道庁職員厚生課の医療参事から南は沖縄県南部保健所の医師まで103名が受講し、愛知県は私1人であった。その内訳は、保健所長44名、市立・県立病院の医師が25名、職員部や安全衛生部で働く本来の産業医が23名、開業しながら地方自治体の産業医をしている先生他が11名であった。

プログラムは「地方公務員と安全衛生」のような総論が2題、「地方公共団体におけるメンタルヘルス対策・健康管理の実践」などの各論が3題であった。しかし内容的には日本医師会や産業衛生学会が主催する産業医学の講習会と大差なく、その点がやや物足りないようで、もう少し独自のカラーがあってもいいように思われた。

東海地方会員の中でも地方公共団体の健康管理をされている先生が多くみえると思います。このような研修会がこれから1年に1回開催されるとのことです。受講してみたいかがでしょうか。

*問い合わせ先：財団法人地方公務員安全衛生推進協会

〒100 東京都千代田区一番町25番地ダイヤモンドプラザビル内

これからの諸行事予定

平成5年度東海地方会研修会

開催日時：平成5年6月11日(金) 10:30~17:00

場所：静岡県産業経済会館（静岡市）

会費：4,000円、懇親会費：5,000円

プログラム

10:30~11:00

開会挨拶

東海地方会長挨拶

理事長挨拶

11:00~11:20

来賓挨拶

11:20~12:40

講演「高齢化社会における労働衛生—その実験的研究—」

祐田泰延（静岡県立大学薬学部産業衛生学教授）

12:40~13:30

昼食休憩

13:30~14:00

東海地方会総会

14:00~15:20

講演「海外生活と感染症—特に途上国の寄生虫について—」

佐野基人（浜松医科大学寄生虫学教授）

15:20~15:30

コーヒーブレイク

15:30~16:50

講演「世直し不況をのりこえて」

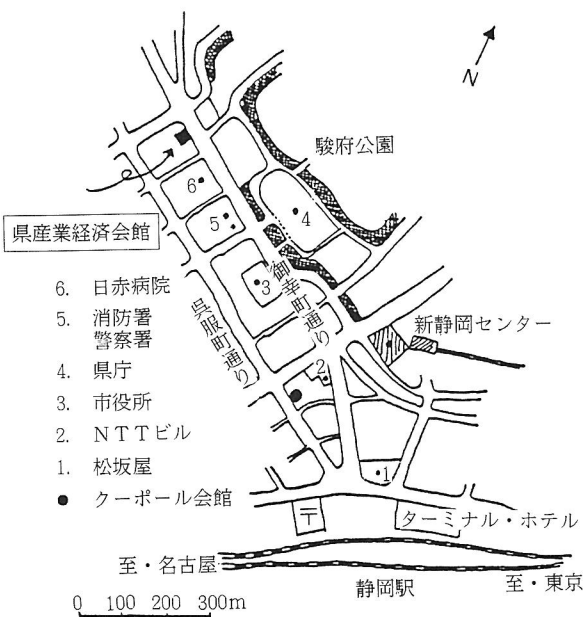
堀内俊夫（財団法人 静岡経済研究所専務理事）

16:50~17:00

閉会挨拶

17:30~19:00

懇親会（クーポール会館）



第8回 日韓産業保健学術集談会

会期 平成5年5月17日(月)~18日(火)

場所 きょうと平安会館

健康社会フォーラム I N名古屋

日時 平成5年6月18日(金) 13:30~16:40

場所 名古屋国際ホテル

特別講演 「男は仕事・女は冒険」

今井通子（登山家・医学博士）

「健康社会への挑戦」

—明日を夢みる職場の健康支援—

島 正吾（藤田保衛大・医・公衛）

岡 惺治（健康管理コンサルタント）

梅澤 勉（日本予防医学協会）

主催 (財)日本予防医学協会健康社会フォーラム推進室

第7回 健康度評価研究会

日時 平成5年6月25日(金) 13:30~17:00

場所 名古屋大学医学部鶴友会館

講演 「健康増進活動としての職場ストレスへのアプローチ

—カラセックのデマンド・コントロールモデルを中心に—」

小林章雄（愛知医大）

「精神健康のレベルを考える」

渡辺久雄（愛教大）

日本産業衛生学会新理事長 島 正吾先生を励ます会

日時 平成5年6月26日(土) 18:00~20:00

場所 ホテルナゴヤキャッスル（天守の間）

事務局 藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学教室

第33回 全国産業健康管理研究協議会全国会議

日時 平成5年7月3日(土) 10:00~17:00

場所 東京虎ノ門・発明会館ホール

主題 「健診結果の活用をめぐる」

世話人代表 小沢勝美（日本予防医学協会）

第28回 日本循環器管理研究協議会総会

日時 平成5年7月9日(金)~10日(土)

場所 札幌市教育文化会館

主題 「成人型循環器疾患の予防と対策

—医療各分野からの包括的アプローチ—」

会長 飯村 攻（札幌医科大学第二内科教授）

会員の移動

新入会員 8名

愛知 林 隆行(横浜ゴム健康保険組合)、臼井和男(東亜合成)、岩田重信(藤田保衛大・耳鼻咽喉科)、市原英隆(名大・医・衛生)、劉 恵芳(藤田保衛大・医・公衛)

岐阜 安藤篤実(岐阜大・医・衛生)

三重 三浦 力(東ソー)

静岡 荒木俊行(西伊豆病院)

転入会員

松下兼昭(東京→静岡)

退会会員

愛知 小川佐千夫、和田 淳、

平岩 恵

静岡 安井寿美子

会員の叙勲・表彰

勲二等瑞宝章

館 正知

(元岐阜大学学長)

勲三等旭日中綬章

奥谷 博俊

(名古屋市立大学名誉教授)

久保田賞

柏木 正雄

(トヨタ関連部品健保組合顧問)

日本産業衛生学会名誉会員

皿井 進 (大同病院名誉院長)

井上 俊 (名古屋大学名誉教授)

井田 龍三 (岐阜県労働基準協会連合会顧問)

名誉東海地方会長

皿井 進 (大同病院名誉院長)

新刊紹介

じん肺の歴史 — 現状と将来 —

医学博士 吉野貞尚著

発行 六法出版社

定価 2,800円

地方会理事会

第5回理事会 平成5年1月12日(火) 名大鶴友会館 出席者: 20名

議題

報告事項

- (1) 本部・事務局からの連絡事項(島・谷脇)
- (2) 地方会ニュース新年号(第26号)の発行(岩井)
- (3) 平成元年度東海地方会誌の発刊(森川)

協議事項

- (1) 第9回産業医、産業保健婦、産業看護婦、衛生管理担当者のための研修会(岩井)
- (2) 地方会関連研究会
 - ① 中小企業衛生問題研究会(島)
 - ② 第6回職業性肺疾患研究会(久永)
 - ③ 第6回振動障害研究会(神原)
- (3) その他
 - ① 井田龍三氏の名誉会員への推挙(島)
 - ② 竹内康浩氏の東海地方会長信任投票(島)
 - ③ 地方会会長推薦理事候補者の発表(島)

第6回理事会(新・旧合同) 平成5年3月16日(火) 名大鶴友会館

出席者: 37名

議題

報告事項

- (1) 本部・事務局からの連絡事項(島・谷脇)
- (2) 産業保健センター(仮称)構想について(服部)
- (3) 第9回産業医、産業保健婦、産業看護婦、衛生管理担当者のための研修会(岩井)
- (4) 第6回職業性肺疾患研究会(久永)
- (5) 第6回振動障害研究会(山田)
- (6) 第26回中小企業衛生問題研究会全国集会(仙台)(久永)
- (7) 第20回職業性アレルギー研究会特別企画(島)
- (8) 竹内康浩氏の東海地方会長信任投票結果(森川)
- (9) 竹内康浩新東海地方会長挨拶

協議事項

- (1) 平成4年度事業報告(案)、平成4年度会計報告(案)(谷脇)
- (2) 平成5年度事業計画(案)(谷脇)
- (3) 平成5年度東海地方会研修会(静岡市)(清水)
- (4) 平成5年度東海地方会学会(岩田)
- (5) 地方会関連研究会
 - ① 第5回産業神経行動学研究会(竹内)
 - ② 国際中毒性末梢神経障害研究会(竹内)
- (6) 地方会ニュース(第27号)の発行(岩井)
- (7) その他
 - 東海地方会各部業務分担表(案)(島)

編集後記

地方会ニュースも今回で満9年を経過し、第27号を刊行することが出来ました。4月より新年度になり、昨年の選挙により当選された前東海地方会長島正吾先生が、日本産業衛生学会理事長に就任され、東海地方会長には竹内康浩先生が就任されました。日本産業衛生学会及び東海地方会も新しい体制で執行されることになり、新風が吹きこまれることが期待されます。本号に両先生からの将来に対する抱負等の寄稿を頂きました。東海地方会ニュース編集委員も学会の新体制に応じて大部分が新メンバーに変わる予定で、次号からは新編集委員によって、新しいエネルギー、構想のもとに引続き発行されていく予定です。会員の皆様方には今迄通り、新編集委員に、あたたかい御指導、御協力、御援助をお願い致します。

(小森義隆)

次回発行 平成5年9月1日

編集責任者 岩井 淳(全日本労働福祉協会)

編集委員(五十音順)

柏木時彦(柏木事務所) 加藤保夫(岐阜県産業保健センター)

五藤雅博(旭労災病院) 後藤 猛(ヤマハ健康管理センター)

小森義隆(大同病院) 竹内康浩(名大)

谷脇弘茂(藤田保衛大) 中川祐子(東芝三重)

久永直見(名大) 森川利彦(三菱電機名古屋)

吉田 勉(藤田保衛大)